
真・恋姫†無双 転生して悪魔狩り_(仮

black strawberry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 転生して悪魔狩り―（仮

【Nコード】

N0750W

【作者名】

black strawberry

【あらすじ】

——前回のあらすじh「いやいやいや！前回なんて無えから！初投稿だろうが！」うるさいなあ……。ちゃんとわかってるよ。

ったく、……では改めて

——この物語はフィクションで「だから真面目にやる気あるのかよ！？」失敬な。それくらい一杯あるわ！

——当作品の内容としましては、不良少年である主人公が神様絡みのもめ事に巻き込まれた挙げ句にブツ殺され、チートを付けられ転生させられるお話です。

「簡単に纏めやがったな、おい!？」

だから失敬な、俺様の頭脳をフル稼働させて考えた駄文だぞ？

「尚更ダメだろ!？」

大丈夫だ、気合いで乗り越える

それでは、この小説を読んでくれる皆さん
誠にありがとうございます

「くだらね」や「面白くねえ」、「つまんね」など、気分が害された方については申し訳ございません。

そのような場合にございましては、画面上の『戻る』をクリックするか、『バック』ボタンを連続プッシュしてください

それでも「大丈夫だ、問題無え!」といった、大宇宙のごとき寛大なお心を持った方だけお進みください。

………あ、あまり期待しないでね…？

†プロローグ（前書き）

プロローグです

駄文ですよ？過度な期待はしないでよ？
ストレスで胃が限界突破しちゃうから……

「プロローグ」

太陽の光が遮られた、薄暗い路地裏……

奥にある少し開けたスペースにたたずむ二つの影……、一人は現代の若者風な服装に身を包んだ男……もう一人は、長ランに身を包んだ少年

その二人の周りには数人の男が倒れている

——バキィッ

「ギャッ!!!」

顔を殴られた男は、壁にぶつかり前のめりにアスファルトに倒れた
その様を見て、短ランの少年——天弥あまみ 翼つばねは倒れている男たち9人の財布から金を抜き取る

「チッ……シケてんな」

五万四千と九百二十円。合計金額を見て仁はスッカラカンの財布を捨て、男たちを見下ろしながら悪態を吐く

「はぁ……めんどくせ。最近をよく絡まれるな……」

ズボンのポケットから取り出したケータイで時間を確認する……

13時19分

「（……そろそろ昼飯にするか）」

仁は、生ゴミが大量に入ったゴミ箱を蹴り男たちにブチまけた

「（ま、これくらい掛けとけば夜まで動けねーだろ……）」

——15:27——

翼は昼食を済ませた後、適当に町をブラついていた

「（……ゲーセンでもいくか）」

空を見上げながら歩く

「（ああ……いい天気だなこんちキショー）」

——ドン

「きゃっ!？」

目だけを動かして周囲を確認すると、いつの間にか人だかりが出来ていた

「（とりあえず、コッチ（親子）をどうにかしねーと）」

無言で目線を少女と合わせ、手を伸ばす

「ひうつ!」

——ポンッ

「……怪我ア無いか？嬢ちゃん」「えっ？…う、うん」

少女の頭に手を置き、なでる

少女は戸惑いながらも返事を返す

「そりゃあ良かった。……悪かったな、クレープ台無しにしちまって……ほら、手え出しな」

言われるがままに手を差し出す少女に、先ほどカス共から没収した千円を渡す

「これで新しいのを買いな」

「あ、ありがと！お兄ちゃん！」

「いいってことよ。」

「良かったわね、舞。」

「じゃあな、次は気を付けろよ？」

「うん！」

お兄ちゃんバイバイ！と手を振って信号を渡っていく少女を見送っていると、視界の端にトラックが猛スピードで走ってきているのをとらえる。

さらに……

「（おいおい！？このままじゃあの親子に突っこんじまう！あの親子は気づいてねーし……クソッ！）」

思考時間にして約一秒。

力一杯アスファルトを蹴り、親子の元に駆け寄る

……が、

「（うおっ！？もう目の前じゃねえか！）……しゃーねーか」

成美はそう呟き親子を抱え、笑顔で少女に話しかける

「じゃあな嬢ちゃん、いい女になるんだぞ！……おおおおおらあッ！！」

全力で、尚且つ怪我をしない程度の力加減で、親子を人が集まっているところに投げる

『ブオオオオオオオオオオオオッ！！』

……トラックに轢かれてオダブツのはずが、いつの間にやら室内に移動していた

「……………あ？」

見覚えのない部屋、部屋の中心になぜかディスプレイが浮いている

「（どういう仕組みだ？）」

暫くディスプレイを見つめていると、電源音と共にディスプレイが起動……少し間を置いて、文字が浮かび上がってきた

『あなたワ、死ニマシタ』

.....

「.....は？」

.....
to
be
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

† 第1話「（前書き）」

はぁ……………。

最近、バイト先の店長がウゼエ……………。

ストレスで胃が天元突破しそう……………（泣）

……………なんか、スンマセン。

愚痴をこぼせる場所ほしかったんです

……………では、どうぞ

＋第1話

『おーめでーとおー いやあーツイてるよお♪転生だよ！てんせい！嬉しいね♪楽しいね♪』

「なにがだよ」

突如現れたディスプレイに映る謎の巫女さんみたいな格好の、超がつくほどの美人——ただし、残念がつく——が何故かハイなテンションで意味不明なことをペラペラと喚いている

『途中から口に出てるよ？それに意味不明とはひどいことを言うね』。……………っ…しゅと

すると巫女さんはディスプレイの縁を内側から掴み、頭から出てきて……………は？

「いやいやいやいやいや！有り得ねえだろ！？どうやってら画面から出て来れるんだよ！？」

「『有り得ないなんて有り得ない』……………、いい言葉だね」

「限度があるだろっ！？」

「んもー堅いこと言わないの！そんなのじゃ女の子にモテないぞ？」

「いや、そう言う問題じゃねえから!!」

「そうなの? (? O W O ?)」

「あたりまえ―『久しいな天照』うお!? なんか来た…… って天照う! ?」

ボケとツツコミを繰り返していると巫女さんの隣の空間が避け色白でマツチヨでダンディーな白い顎髭を蓄えたおっさんが現れた…… なんか神々しい槍を携えて

「おっくゝ”無駄ンデイン”」

無駄! ?

「ワシは”オーデイン”だと何度言ったらわかるのだ? お主は……」

オーデイン! ? こんなムキムキの無駄マツチヨが! ?

「いいじゃん♪ いいじゃん♪ 親しみを込めて呼んでるんだからさっ
(O W)」

…… だからって無駄ンデインってのは酷くね? って言うか貶してるだろ、これ

『うつす、久しぶりだな、天照にオーデイン』

またも空間が裂けた。出てきたのは鋭い目付きのワイルドな青年、腰辺りまで伸びた銀髪に、微かに透き通ったガラス玉のような黒い眼球の深紅の瞳、肌は漆黒で服装は、上半身が裸黒のダボツとした

ズボンにスカートのような腰巻き、そして、黒の剣を腰に携えている
……………黒だらけだな

「おっひさー 会いたかったようゝスサのん」

「ぷぷつ……。久しいのう、スサのん。……ぷつ」

あ、オーデインがニヤけてやがる……。オッサンのニヤケ顔ってかなりきついな

「じゃかあしい無駄ヒゲ、キモい」

「……………ヒゲだけは自信あったのに」

オーデインは隅っこでイジケ出した！

「ああ、アイツのことは放つといてサツサと話をするぞ。…………その様子じゃあ、まだ何にも聞かされてないみたいだからな」

……………あん？

説明中

ナウ ローディング……………

「——つまり、その悪魔共が自分達の世界を手に入れるだとか小学生じみた欲望のもとに反乱起こして、その反乱によって起きた被害の後処理に追われ、その隙に大量の悪魔と平行世界に散らばったと。」

「……そして、アンタ等が平行世界に干渉できねえから急遽、悪魔を駆逐できるであろう人材を探していたら俺がヒットした。」

「しかし寿命はまだまだ先、このままチンタラしてたら平行世界がメチャクチャに……。」

「今回は、今っ回は超異例の緊急措置として、本来死ぬハズだった親子の代わりに死んでもらい、能力を付けて平行世界に送ろうと……。さらにこれはお前らの上司であるゼウスも賛成したから拒否権利って言う人類の特権の一つすら使用不可能だ、と。……長々と話したがこれであってるか？」

「……よくできたな（ましたー）」「……」

「また増えてる！？」

「巫女な天照と無駄マッチョなオーディンと黒い人（まだ名前は聞いてない）との説明会にいつの間にか参加していた女性、

背中辺りまで伸びた髪は焰のように揺らめいてる、瞳は髪と同じく青焰を連想させるかのような蒼色、肌は白い……。ちよつと外に出て光合成してきなさいと言いたくなるくらいに。」

「そして体型なんだが……、」

「良く言えばスツキリとした、悪く言えば、断崖絶壁、フラット

……まあ簡単に言うとは幼児体け……いや、幼女^{ヒンヌー}体型つてやつだ。そして最後に服装、これはシンプルだ。ディニーの大英雄を題材にした映画の冥界の王を思い浮かべてくれ、全く同じ格好だから

「……あ、私？私は冥界の王のハデスちゃんなんだよ」

わー、服装だけじゃなかったよー、つてか統一性がねーな
なんだよ巫女に無駄マツチヨに真つ黒の痴漢にツルペタ幼女つて、
どっから見ても変態集団じゃねーか。あれか？俺もその集団に仲間
入りか？冗談じゃねえ、誰が好き好んでこの中に入るかってんだ」

「口に出てんぞ？」

「……ちなみにどから辺りから？」

「ツルペタ幼女の辺りからだ」

「幼女つて言うな」

「つて言うかお前は誰なんだよ、黒いの」

「無視するな」(泣)

「あ？そついやあ名乗ってなかったな。オレは”スサノオ”だ」

マジで？見た目が凶悪な不良を真つ黒にした感じなの？

「オレは正真正銘”スサノオ”だ。見た目に関してはオレが気に入

スサノオノミコト
つてる漫画に『凄乃男命』ってのが出ててな。”スサノオ”の名を

冠するモノは全部オレの一部だからな。他のヤツ等も同じだ」

つまり、スサノオって名前が付いてるやつなら何にでもなれるし自由
に力を操れるってことか、ってことか

「まあ、そう言うことだ。そろそろ本題に入るぞ。………って、い
つまでもそうやってるつもりだ？」

「「だつて……ぐすつ（Ｔ＾Ｔ）」」

「ワシなんか肉体とヒゲをいじった後に放置されて空気にされて……
（泣）」

「「「キモいから泣くな、オッサン」」「」」

「ちと酷くないかのっ!？」

「まあそれで、だ。今のお前を送ってもザコ悪魔一匹がやっとだろ
う」

「じゃあどおしろってんだよっ!？」

「良く聞いてろよ。今の、つつただろーが。そのためにオレ等が
集まってんだよ」

「ボクたちが、君に能力を付けて悪魔と戦えるようにするんだよ」
「」

「私たちみんなで付けるから超チート転生だね」

「それでもせんと、あ奴等にはかてんじやろて」

「……………どんな奴等だよ」

「”七つの大罪”とその他モロモロ」

「無理だろツ！？確実にこっちが殺られるわ！！」

「大丈夫だ、問題ねえ。確かに、神にでもならん限り簡単には殺せねえ、だが、神になっちまったら世界に干渉できなくなる…が、力を継承、譲渡することはできるんだよ。」

「????」

「ま、簡単に言うとな、オレの一部である『スサノオ凄王』の力をお前にやる、ってことだ。ちなみに、漫画の方じゃあ暴走してたが、そうならんように修正しといた。……………ま、力に吞まれん限りはな。」

「……………あー、つまり、天上下下の『スサノオ凄王』に暴走せずになれますよーってことか？」

「簡単にまとめやがったな。……………まあいい。とりあえず、墮天使クラスの悪魔対策はこんなもんか。他に要望があれば取り入れるぜ。」

「……………武器は外せねえだろ」

「武器を「ハイツ！」……………」

「なんだ？天照」

「『^{ゲイト・オブ・バビロン}王の財宝』は外せないと思うのだよ」

「何テメエが案だし「採用！」っていいのかよッ!？」

「わーい♪やったやったあー」

「武器は後でオレ等が適当にブチ込んでいてやるよ」

適当にかよ!？

「……ならバイクも寄越せ」

「オーケイ、それもブチ込んでくぜ」

「結局ブチ込むのかよ!？」

「ワシは「」「」「却下」「」「まだ何も言つとらんのじゃが……」。

「……………しょうがねえな。ほら、とつとと喋れ」

「今の間は何じゃ!？」

「あと三秒」

「ステータスの魔改造を進言する」

「……………おいテメエ……………俺を改造人間にするつもりか？」

「採用ッ！」

「俺のことは無視か!?!」

「安心しろ、改造はこつちでやっつく」

「安心できるかッ!?!」

「他はあるか?」

「いいこと思い付いちゃったんだよ!」

「……変なことの間違いじゃね?」

「失礼だよ。…えっとね、転生した後も私たちが、コレはいいんじゃない?って言うのがあれば、どんどん付け足していけばいいと思うんだよ!」

後付けバンザイってか?ふざけな「採用ッ!」「……もう好きにしてくれ」

「後は狩りの相棒だな」

「それはワシが用意した。」

「……もうどうにでもなれ」

「コイツじゃ」

そう言つと、無駄マッチョの「天の声（作者）からもこの扱い！？
ワシにはちゃんとした名前があ「黙ってる屑」…格下げ！？ワシ泣
いちゃうぞー！？いいのk「「勝手にしろよ」「……シクシク」
……屑の足下が光輝きだした。

「わんっ！」

「……………」x 5

光が収まるとそこには、純白の——それもかなりの艶がある毛並み、
そして俺と同じ空色の瞳をした、尻尾が二本ある仔犬がいた

かつ……………かわええ……………

「天狼という種族での。更にコイツは中でもトップクラスの実
力を持つておる」

「ちなみにどれくらい？」

「一般人が前足の一振りで消し飛ぶ」

「どんだけ強いんだよ！？」

「安心しろ、本気を出すのは基本敵だけじゃからな」

「んなこと言われたら逆に不安になるわ!」

「くうくん」

「おお、よしよし。……で?コイツの名前は?」

「まだ名前は決まっておらん。お主が決めてやったらどうじゃ?」

えー、俺が決めんのかよ。めんどくさいな……。でも相棒の名前だしな……。ここでふざけてポチとかけたら肉塊になるんだろ
うな……。嫌だな。真面目に考えるか

……。

……。

……。

「……………決まった」

「???」

「——お前は、『ルウ』。……イタリア語の『狼』からとった」

「わおん!」

ぱたぱたぱた!と尻尾を振る
気に入ってくれたみたいだな。

「……………って言うかそろそろ送るぜ？」

「「さん　せーいっ」」

「あ、反論は受け付けねえぜ？録画の準備とかあるからな」

……………は？録画？

「ああ、オレたちは後処理が多くてあまり転生後のようすを見てられねーのさ。お前は、悪魔狩りの仕事をする代わりに新しい生を得る。オレ達はお前という娯楽を得る。」

「俺はオモチャか！？」

「ギブアンドテイクって奴でさあ、旦那あ」

「お前は黙ってろ！！」

「安心してヨ！記録されるところは戦闘と日常風景に限られてるから！たとえ夜の営みに発展しても大丈夫だから！」

「安心できるか！！ってか、余計なお世話だ！！／＼／」

「……………録っちゃっていいの？」

「勘弁してください！！」

「これで暇潰しが手に入ったの」

「アア！？つてめ、それどういう意味だよ！？」

あの肩に掴みかかるうと足を一步前に出した瞬間、軸足に急な浮遊感に襲われた。首だけ振り返ると――

「……………ゑ？」

――穴が開いていた
ただの穴じゃないぜ？底が見えないんだぜ？

「――ッテンメエ等……………！！」

首をもとに向き直すと、左から…

黒いの ↑ヤンキー座り

ざんねん巫女 ↑菓子を片手に手を振っている

つるペッタン ↑両手を振りながら軽くホッピング

ムダマツ（以下略） ↑腕を組んで威厳ありますよ？みたいに突っ立っている

「じゃ、達者で暮らせい」

「「ばーいばあーい」「」

「また死んだらの」

「死にさせやクソ共がああああああああああああ
あああ.....!!」

そして視界、意識ともにブラックアウトした

「第2話」

..... チュンチュン..... チチチチチ..... チュン..... わん
..... チチチチチ..... わん

「..... はっ!？」

知らない天じ..... 目を開いて一番に見えたものは、きれいな青空だった。

そして、視界の端に僅かだが緑が映る。

——ズキッ

「ッ!??~~~~~」..... 痛つてえ.....」

何故か痛む頭を手でおさえながら体を起こ——「わんっ!」

——ズドオッ!

「ぐはッ!？」

……体を起こした瞬間、銀色の物体A——ルウが尻尾を振りながら翼に突進。

スゴい勢いで近く——それでも5mは離れていた——樹に突っ込んだ

——ズウン……

「……………ゑっ？」

……………マジで？確かに衝撃は来たけど何で樹が折れてんだよ？

——『ステータスの魔改造を進言する』

——『改造はこっちで勝手にやっというてやるって』

……………マジで改造されたのか

いや、でもよ……岩が砕けるようなスピードで突っ込んで無傷って

……

「わんっ！」

「……………ルウ、加減を考えろよ？一般人にやったらマジでただ事じゃなくなるからな」

間違いなくモザイクが必要になる

「くうくん……（しょぼん……）」

「わかつたんならいいんだよ。……ただし、次からは気をつけろよ」

「わおん！」

——めーるだよ♪はやく読んでね♪めーるだよ♪はやく読んでね♪

「メール？誰からだ？

ウザいな。この着信音……

ってかスマホかよ」

——差出人、てる、照ちゃん

『ヤッホー ツバちゃん元気い？ボクは元気だよー♪』

……イラッ……

『スサのんも、ハデちゃんも、元気だよー♪……あとヒゲマツ
チヨも』

マッチョはついで扱いかよ！？

『これを読んでるってことは、チートの付加は成功したみたいだね
……』

……何が言いたんだコイツ？

『いやゝまさか間違えて大気圏から自由落下させちゃうなんて思
つてもみなかつたからねゝ』

大気圏から自由落下あ！？どう言うことだゴルア！！

『ごめんねゝ？でもあゝ、近くにクレーターがあると思うよ？』

近くにつつつてもな……
んなもん見当たら……ん？あそこだけ妙に開けてるな……

『いやゝ頑丈で良かったね

(≡ ω ≡) ぽ』

……あつたよ、でっけえのが
しかも2つ……どう考えてもルウだよな？
っていうか、頭痛の原因つてこれか？
この規模で、頭痛だけか？

——ああ…俺、なんもしてねえのに化物の仲間入りか（泣

『つとつと、忘れてた……。えっとね、ツバサちゃんが転生した世界は『真・恋姫無双』って言う三国志の世界なんだって。』

……………ゲームかなんか？それは…

『でね？いくつか注意事項があるんだよ。まず1つ目は、三国の将がみんな女の子なんだよ』やったね！うまくいけばハーレムエントだよ』

やかましいわ！

『そんで2つ目は、って言うかこれで最後かな？その世界の人たちは『真名』っていう特殊な名前を持ってて……』

……………なんか、聞いとかねえとヤバイ気がするな

『たとえ知っていても、真名をその人の許可なく呼んだら首チョンパになっても文句言えないからね？気を付けてよ？』

ありがとうございました
俺、知らなかったら絶対首チョンパになってたぜ
助かった…………

『じゃ！また何かあったらめーるするよぉー』

照ちゃんより
『

また？次もこんな感じでメールが来るのか？
やめてくれない？ストレスがたまるから。イライラでハゲるから

「しゃーねえ……………こんなとこでじっとしてても始まらねえ。移動
するか！」

「わんっ！」

つた

ん？……………あれは……………村か？

ま、他に行くところ無えし……………とりあそこの村に行くか……………

目よくなっただんな、俺

村の場所、地平線の辺りだし

はあ
.....

＋第3話

.....

「やっと着いた.....」

..... おつす、俺だ。天弥 翼だ。

あれから村に向かったのは良いんだが.....遠すぎだろ!?

何で村から五時間以上も離れたところに降ろすんだよ!?

せめて、乗り物くらい用意しろや!!

『まーまー、落ち着きたまへ

バイクや武器は明日くらいに届くからさ』

さっじゃ、ねえよ!! ったく.....

ま、着いたには着いたさ

遠かったせいで暮れ時だけどな。

「あゝ.....、とりあえず飯にするか。何も食ってなかったしな」

それからすぐに適当な店に入って席につく

「一番自信のあるヤツを頼む」

「兄ちゃん、ここは俺の店だぜ？全部自信あるに決まってんだろ」

「さすが。じゃあ……ラーメンと炒飯、あと餃子も頼むわ」

「即決だな……理由を聞いても？」

「簡単な料理ほど、その人の腕が分かりやすいってな。あ、あとコイツにも何か頼む」

「へっ！言うじゃねえか！……待つてな、兄ちゃん！最高に美味くしてやるよ！もちろんそっちの犬にもな！」

「そつだ、ここら辺に宿つてあるか？」

「ああ、それならココに行くといい」

「ありがとよ……んじゃ、ご馳走さんした！」

「おう、また来てくれや！」

さてと、腹も膨れたし、今日は宿に行つて休むとするか

陽は沈み、月と星の明かりが夜を照らす

昼間の賑やかな雰囲気とは違い、静かな通りを月の光が差す

そして静かな夜は更けていく

— s i d e . . . ? ? ?

静寂が支配する闇の中……

その中で存在を主張するように光を放つ炎が複数あった

「頭あ！準備できやしたぜ！」

「……………よしなら明日に備えて寝るぜ。……………おい、女には手を出してねえだろうな？」

「へい！でもどうしてやらないんです？正直溜まりまくってるんで

すがねえ……」

部下の肩を落としながらの言葉にニヤ……と、汚い笑みを浮かべながら言い返す

「ばあか……少しは頭を使え……女の数が少なけりゃあ全員に回らねえだろうが。だから少しでも長くやれるように女を増やして、一気に楽しむんだよ」

その言葉に顔をニヤつかせる

「つてえこては、前みたいに待たずにやり放題ってことッスか！」

「へっ……まあ寝とけ。明日は忙しいぜ」

「へいつ！」

やがて火は消え、夜は更にフケていく……

——side・賊

「第4話」（前書き）

最近、バイトが凄まじく忙しくなったんだ……

勉強とバイトの両立

ただでさえ難しいのに、家の手伝いやら予習に復習、連れと遊んだりしていると時間が無くなって……

更には睡眠時間まで少なくなっちゃって……

この小説は話しごとに文字数がバラバラだったりします

今回は長めっす

見てやってくれると超嬉しいっす

† 第4話

日の出が始まる頃

村を出てすぐの場所に動く影があった

……9989……9990……

少年——天弥翼はひたすら一つの動作を繰り返している

……9993……9994……

両の目を瞑り、両の手を合わせ、目を開き、両手で拳を作り、左の拳をひいて右の拳を突く

この動きをひたすら繰り返す

一突き一突きに感謝の念を込めながら

……9998……9999……10000！

「っし！感謝in正拳突き左右10000回つつ終了！あとは余った時間で『憂さ晴らしの蹴り上げ』でもやっとくか」

説明しよう！

憂さ晴らしの蹴り上げとは、面倒くさいことやム力つくこと、その他モロモロな事情によってたまった鬱憤を晴らすために編み出されたのだ！

やり方は簡単！

抱き枕のシーツに使い古して着なくなったボロTシャツやズボン、布団、ボロカーテンなどを詰め込むだけ！それだけで、ちょうどいい重さで柔らかい簡易式サンドバックの出来上がり！

さあ！あとは蹴り上げるだけだ！

そして！ここからがポイント！

蹴り上げるときにム力つくヤツの顔を思い浮かべ、そいつの腹を蹴り上げると更にスッキリするぞ！

くくくある空間

「……………アイツのステータス、魔改造するところ無えんだけど」

「そうじゃの。むしろ武器とステータス上昇の限界値を取っ払うだ

けでよかったのかもしれない
必要なものは後でやればいいしの」

「……………小学時代から上級生と喧嘩三昧。
中学時代には40〜50人程の武器（木刀、鉄パイプ、メリケンサック、釘バットetc……）を持った不良グループor族と何度も喧嘩。

……………この時に何度も殴られ頑丈さ、反射神経、回避技術が異常に上昇。

高校時代では相手の人数が増え、更に何故かヤクザとも喧嘩をすることになる。そして、ヤクザに命を狙われ続け、殺気、殺意に敏感になった、と……………」

「……………随分と喧嘩三昧な人生じゃのう」

「運なさすぎだろ。コイツ、身体スペック上げなくても呂布とタメ張れるぜ。素手で……………ってか身体スペックがチートのクセに運が無えってどうなんだよ……………」

「じゃな。コヤツは戦闘をすることで成長するようじゃの。……………運の方は成長するどころかむしろ悪化しとる様じゃがな。

まあ、貴様が譲渡した”力”もいずれ扱えるようになるじゃろうし……………」

「ま、魔改造してねえんだから、今んところはステータスの限界値を取っ払って、武器とかコイツが要求してきたもんにできる限りで答えりゃいいだろ。……………運だけは何故か手がつけられなかったけどな」

「ふう………」

そろそろいい時間だな。

ルウ、戻るぞ！」

「わおんっ！」

腹減ったしな

もう村の人たちも起きてるだろし……飯食って村を出るか

「おっちゃん、また来たぜ！」

「おっ！兄ちゃん、また来てくれたのか！」

「まあな

油を控えめでアツサリしたやつをたのむ」

「おう！任せとけ！

そっちの犬の方にも美味しいもん食わせやるよ！」

「わん！」

「頼む」

「はいよ！お待ちどうさん！」

お！来たか…… やっぱすげーうまそうだな

「いただきます」

「……なんだ？それは」

「……ああ、これが。」

これは食前の挨拶みたいなもんでな
意味は確か、全ての食材と作ってくれた人に感謝を…… みたいな感じだったな」

「……聞いたことがねえ作法だな」

まあ、他の国は興味ねえから知らねえけど、日本の文化だからな

「……俺の故郷じゃあみんなやってるが、単純に文化の違いだろ」

そろそろ食わねえと冷めちまうな……

飯は温かい内が一番美味いからな。さっさとくつか……

「なんだこのクソまずい飯はあ？」

料理が口に入りかけた瞬間、店の奥の方から怒声が響いた

「……………」

「お客さんどうしたんですかい？」

おっちゃんがすぐに駆け寄る

「どうもこうも、俺の分に髪の毛が入ってるし！どういっこだよ？」

「こんな糞マジいメシ客に出してんじゃねえよ？舐めてんのか！？ああ？？」

「そんなはずはねえ

異物混入は一切ないように注意をしているし、ましてやまずいメシを客にだすなんざもってのほかだ」

ま、このおっちゃんに限って、（飯に）手をぬくなんてないと思うが……

あの三人組、すんげー小物臭がするんだけど

「だあかあらあ？髪の毛が入ってるは飯はクソまじいは？どうすんだって聞いてんだよゴルア？」

「なら帰ってくれ、金は取らんから」

は？

「……………ッテ、テメエ？それが客に対する態度かあ！？あんま舐めてつとぶち殺すぞ？」

「誰が舐めるかっての……………キタねえ」

当たり前だろ

「だいたい、その髪の毛……俺のよりだいぶ長いような気がするが？」

ほれ……と、飯に入っていた髪の毛を自分の顔の横まで持ち上げる

……確かに、おっちゃんの髪は短髪、クレーマーもどきの方は長めだ……後の2人はハゲだし

ぐっ……、と口ごもる三人組

……凶星なのな

「と、とにかく！こんなマジい飯なんか食えるかあ？金だせえ？」

「……なんで俺が金をださなくちゃいけないんだ？」

「迷惑料だ、迷惑料！こんなクソマジい飯を客に出したんだ！早く金出せえ？これが見えねえのか！？」

三人組のリーダー（仮）がなんかわめき出し、腰に提げていた光り物――蛮刀？を抜き、先をおっちゃんの喉元に向ける

「へへへ……、死にたくなけりや金を全部出せ！」

「……っ……！」

「ハッ！ビビって声も出せネエのかよ？まあいい、早く金だしな、殺しまではし「ハイ ドーン」ねぶらッ！？」

剣先が触れる直前にリーダー（仮）にライダーキツ……もとい、飛び蹴りをくらわせてやった

もちろん顔面に

顔面に飛び蹴りを食らったリーダー（仮）は錐揉みしながら壁に激突した

「アニキ!？」

「ったくよぉ……飯時に、しかも朝っぱらからチャージャーチャーチャーチャー喧しいんだよ……イイ歳こいて反抗期か?このヤロー」

「テ、テメエよくもアニキをッ？」

「うっせえつつてんだろハゲ」

「ア、アニキの仇なんだな？」

「いや、人間あの程度じゃあ死なねえからな？」

こんな問答を繰り返しているとリーダー（仮）が起き上がって来た

「テメエ……、やってくれたなア」

「アニキ?ご無事で？」

「ああ、対したことア無え……」

……頭から血イ出てんぞ？

「ア、アニキ！？生きてらしたんで！？」

「さっきも聞いてたが勝手に殺すな？」

「二回目ドーン」

「あべしっ！？」

「「ア、アニキー！？」」

またリーダー（仮）は錐揉みしながら壁に激突した
……………何コイツら？

「デメエ、またしてもアニキを？」

「いや、じゅうぶん待ったけどよ、漫才してるお前らが悪い」

「アニキの仇なんだな？」

「いや、さっきも言ったが人間あの程度じゃあ死なねえよ？」

また、リーダー（仮）が起き上がって来た

「デメエ！二回も不意打ちって、貴様鬼か！？」

「そう言やあ、地元じゃあよく魔王とか言われてたな」

「「「すでに悪魔すら通り越してたっ！？」」」

……まあ、絡んでくる奴らを一人残らずボコボコにしてたら何時の間にかそう呼ばれてたんだよ

「テメエ……舐めんのも大概にしるよ？」

「おっちゃんも言っただとは思っけど……、誰が舐めるかつつの汚ネエ事言ってんじゃねえよ」

「いい気になんなよ、これが見えねえねか？」

汚ねえ笑みを浮かべながら、さっきおっちゃんの喉元に突きつけていた蛮刀？をチラつかせてきた

「……………で？」

「は？」

「いやいや……………で？ソレでどうすんだよ」

「はっ！強がるのもいい加減にして、命が惜しけりゃ泣いて謝れば許してやらん事もないぜ？」

だれが……………

「泣いて謝んのは、……………テメエらの方だろ？」

数秒後、数発の打撲音の後、村中に三人分の悲鳴が響いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0750w/>

真・恋姫†無双 転生して悪魔狩り_(仮

2011年11月11日11時26分発行